事例紹介

海を越える“Cool Japan”

三菱UFJリサーチ&コンサルティング芸術・文化政策センター長　太下義之

はじめに

日本の現代文化が国内外で大きな脚光を浴びるようになった一つの契機は、米国の外交関連誌「FOREIGN POLICY」に、ジャーナリストのダグラス・マッグレーが二〇〇二年に執筆した論文〈Japan's Gross National Cool〉であろう。

実際、国際交流基金の調査[*1]によると、海外で日本語を学んでいる人は約二九八万人にも達しており、同調査では、多くの国で「マンガ、アニメなどポップカルチャーに対する関心が日本語学習の動機の一つとなっていると報告された」と学習者増加の要因を分析している。

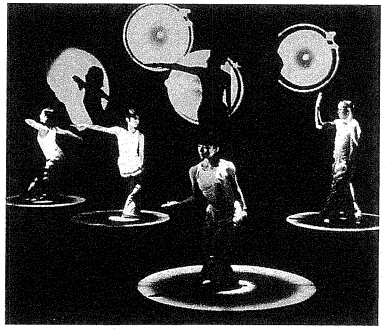
また、中華圏ではマンガ等の日本の現代文化を愛好する台湾人・中国人が増加しており、その総称として「哈日族（ハーリーズゥ）」という言葉が広まっている。さらに、二〇〇七年ころから韓国においては、日本発の映画や小説が流行する、「日流」と名付けられたブームが起こっている。

世界で評価される日本文化

このように海外の多くの人を魅了している日本文化であるが、以下においては、その具体的な事例を分野ごとに紹介したい。

映画

世界三大国際映画祭の一つヴェネチア国際映画祭においては、多くの優れた作品を生みだした監督に贈られる「Leone d'Oro alla carriera（名誉金獅子賞）」が、一九八二年には黒澤明に、二〇〇五年には宮崎駿に贈呈された。さらに二〇〇七年には、現役でありかつ将来にわたってさらに活躍が期待される映画監督を対象として、北野武作品のタイトルを名称とする「Glory to the Filmmaker! award（監督・ばんざい！賞）」が創設され、北野自身が第一回受賞者となった。また、小津安二郎は国際映画祭ではなぜか〈無冠〉ではあるが、海外でも評価は極めて高く、著名な監督によって小津にオマージュを捧げた作品も制作されている。



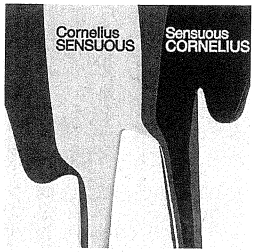
Leni-Basso

演劇・ダンス

伝統芸能の分野においては、「能楽」「人形浄瑠璃文楽」「歌舞伎」が、ユネスコの無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載される予定である。一方、現代演劇に目を転じると、蜷川幸雄は派手なスペクタクルと日本的感性を兼ね備えた演出で海外からも評価が高く、二〇〇五年には、英国経済と文化に功績をもたらした人物に贈られる「Walpole メダル」を受賞している。また、コンテンポラリー・ダンスの分野では、バレエとは異なる日本ならではの身体表現が世界からも注目を集めており、山海塾、勅使川原三郎、伊藤キム、Leni-Basso、黒田育世、金森穣、H・アール・カオスなどは、海外の劇場やフェスティバル等からの依頼公演だけでなく、共同制作作品も多い。

音楽

音楽分野は、伝統的な音楽から最先端の音楽まで、さまざまな日本の音楽が海外で高く評価されている。伝統的な音楽分野では、グレゴリオ聖歌と並び世界最古の宗教音楽と言われる「声明」や、和太鼓（鬼太鼓座、鼓童）、三味線（上妻宏光）、琴（八木美知依）等は、海外でも多数のコンサートが開催されている。一方、新時代の音楽をテーマとした、世界で最大規模のフェスティバル「ソナー（sonar）」が毎年六月にバルセロナ（スペイン）で開催されているが、同フェスティバルには、坂本龍一や Cornelius 等、多くのアーティストが日本から招へいされている。



Cornelius "SENSUOUS"

現代美術

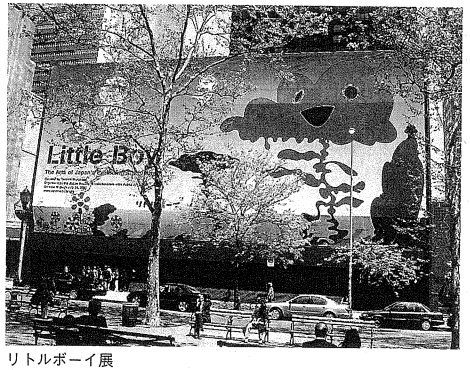
現代美術の分野で、現時点で最も目立った活躍をしているアーティストは、村上隆であろう。同氏は二〇〇〇年にロサンゼルスのゲッティ美術館で、マンガにインスパイアされた「スーパー・フラット」というコンセプトで展覧会を開催した。また二〇〇五年には、日本のサブカルチャーアートをテーマとした展覧会「リトルボーイ展」を企画・開催し、AICA／USA（国際美術批評家協会のアメリカ支部）による「ニューヨーク市における最優秀テーマ展覧会」の第一位に選ばれている。

マンガ・アニメ

日本のマンガ・アニメは、単なる娯楽としてだけではなく、現代文化の一分野としても世界から認知されている。『AKIRA』（一九八四年）等で多くの後進マンガ家に影響を与えた大友克洋は二〇〇五年にフランス政府からレジオン・ド＝ヌール勲章（芸術文芸勲章）「シュバリエ章」を授与された。また、鳥山明の『ドラゴンボール』は四〇か国以上でアニメが放映されており、在仏日本大使館が毎年実施している「フランスで最も有名な日本人はだれか」という調査でも連続して一位となっている、とのことである。[*2]

建築

建築の分野においては、安藤忠雄、丹下健三、磯崎新、槇文彦、伊東豊雄などが、「ロイヤル・ゴールド・メダル」等の国際的な賞を授与され、極めて高く評価されている。また、直近においては、世界的に有名なミュージアムの増築や分館等の設計を日本人が担う事例が相次いでいる。二〇〇四年一一月に再オープンしたアメリカ・ニューヨーク近代美術館の増築部分の設計は谷口吉生、また、二〇〇九年にルーブル美術館の分館がフランス



リトルボーイ展

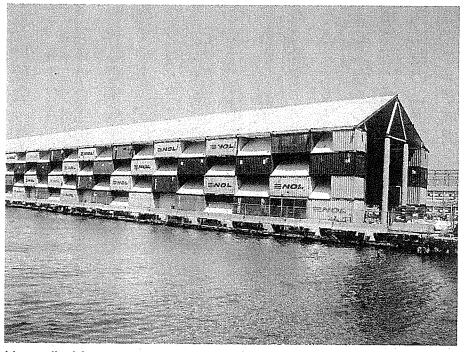
北部のランスにオープンする予定でありこの設計はＳＡＮＡＡ（妹島和世・西沢立衛）が担当している。そして坂茂は、二〇〇三年から世界各地を巡回している仮設の美術展示空間「Nomadic Museum」のほか、二〇〇八年にフランス北東部メスに開館予定のポンピドゥー・センター分館の設計を行っている。

文学

日本文学は、川端康成（一九六八年）と大江健三郎（一九九四年）の二人のノーベル文学賞受賞者を輩出している。また、二〇〇六年一〇月には、村上春樹が「フランツ・カフカ賞」を授与されており、同賞の直近の受賞者が当該年のノーベル文学賞を受賞していたことから、村上春樹にもノーベル賞受賞の可能性があるのではないか、と噂されている。一方、日本の古典文芸作品に対する海外からの評価も高い。二〇〇八年は、世界最古の長編小説とも呼ばれる『源氏物語』が記録のうえで確認されるときからちょうど一〇〇〇年という節目[*3]であるが、その前年二〇〇七年九月には仏語版が翻訳・出版され、豪華本であるにもかかわらず初版を完売したとのことである。

俳句

俳句は五・七・五の音節から成る日本語の定型詩であるが、一九七〇年代に入ってから国際化する動きが顕著になってきており、今では約五〇か国において二〇〇万人を超える人々がそれぞれの母国語や英語で俳句を詠むという「国際的な短詩型文学」に発展している。[*4]


Nomadic Museum

食文化

世界的に健康に対する意識が高まる中で、比較的低脂肪でヘルシーなジャパニーズ・ヘルシーフード日本食が海外から高く評価されている。こうした動向の中、レストランの評価を星の数で評価することで有名なガイドブック「ミシュラン」の東京版が二〇〇七年一一月に発行されており、同書編集の総責任者は「東京は、世界一の美食の町だった」と語っている。[*5]

以上のように、世界から高く評価されている日本文化であるが、いわゆる「ハイ・カルチャー」の分野だけではなく、俳句や食文化のほか、折り紙、盆栽など、日本のライフスタイルや暮らしそのものも世界の人々に愛され、享受されていることが理解できる。今後は、日本文化をさらに振興し世界に発信していくことにより、世界中の感性あふれる人々にとって、日本がライフスタイルの〈憧れの地〉としてみられるようになることを期待したい。

＊1　http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/img/gaiyo2006.pdf

＊2　文化庁主催　コンテンツ流通促進シンポジウムにおける浜野保樹氏の講演（二〇〇四年六月）〈http://www.bunka.go.jp/1tyosaku/contents_sympo/special/01.html〉

＊3　「紫式部日記」の一〇〇八年（寛弘五年）一一月一日の条に、「若紫」や「源氏」などの記述があり、この時点で源氏物語が読まれていたことが確認できる、とのこと。源氏物語千年紀委員会〈http://www.2008genji.jp/imkai/gaiyou.html〉

＊4　国際俳句交流協会〈http://www.haiku-hia.com/kouryu.html〉

＊5　asahi.com『朝日新聞』二〇〇七年一一月一九日〈http://www.asahi.com/food/news/TKY200711190221.html〉

ソフト・パワー

太下義之

「ソフト・パワー（Soft Power）」とは，アメリカの国際政治学者でハーバード大学特別功労教授のジョセフ・Ｓ・ナイが提唱した外交政策に係る概念である。ナイは，著書『ソフト・パワー』（2004年）においてソフト・パワーを「強制や報酬ではなく，魅力によって望む結果を得る能力」であり，また，「自国が望む結果を他国も望むようにする力であり，他国を無理やり従わせるのではなく，味方につける力である」と定義している。

そして，このソフト・パワーは，「国の文化，政治的な理想，政策の魅力によって生まれる」としており，ソフト・パワーの源泉となる三つの要素のうち，“国の文化”が第一にあげられている。

ちなみに，ソフト・パワーの対義語は「ハード・パワー」であり，「軍事力や経済力によって他国に政策を変えさせるよう促せる」力である。

ナイが「ソフト・パワー」と題した著書を執筆した背景としては，アフガニスタン戦争（2001年～）およびイラク戦争（2003年～）を開戦したことを契機にアメリカの人気が急激に低下し，その結果，イラクの戦後統治などにおいてアメリカは国際的な支援を得ることが困難となった点があげられる。こうした事態を打開するための戦略論としてソフト・パワーが提唱されたのである。

ナイはソフト・パワーの具体例をいくつかあげているが，特に冷戦期のエピソードが興味深い。例えば，アメリカ等の西側の映画が持つソフト・パワーについて，「ソ連は西側の映画を制限し，検閲していたが，このフィルターを通った映画すら，政治的に強烈な影響を与えた。（中略）ソ連の観客は政治とは関係ない映画をみて，西側の人たちが長い列に並ばなくても食料を買えること，共同住宅に住んでないこと，自分の車を持っていることを学んだ。そのために，ソ連のマスコミが西側を悪く伝えても，信じられなくなった」と記述している。

日本のソフト・パワーについては，ナイは前掲書で，アメリカ以外の単独の国としては最も多くの分量を日本に関する記述に割いており，「日本はアジア各国の中で，ソフト・パワーの源泉になりうるものをとくに大量にもっている」と高く評価している。ただし，「日本のソフト・パワーには限界もある。（中略）日本は1930年代に海外を侵略した歴史を清算しきれていない。中国，韓国などはいまだに日本への疑念が残っており，日本のソフト・パワーを制約している」と懸念も表明している。

さて，日本でも注目を集めるキーワードとなっているソフト・パワーであるが，あくまでも国益を第一に追求する覇権主義の一類型であり，文化振興そのものが目的ではない点に留意が必要である。同時に，ソフト・パワーに関する議論においては，ナショナリズムの喚起や外交の一手段として文化が利用され，本来文化が持っている重要性が矮小化してしまうことのないよう，留意すべきであろう。